

ジャン・ジャンセンの世界——光・孤独・静かさと祈りと……

笹本 孝

J・ジャンセン、昨今は三越画廊などで「デッサン展」が開かれ、また長野県穂高には、十数年前から「J・ジャンセン美術館（火曜日休館）」が創設され、広く人びとに開放されているので、ジャンセンのきわめて特異な世界に驚かされたひとも多かるう。その異様な人物像やデッサンに惑わされながらも、ひとたびその世界のまえに立つと、知らず知らずのうちに眼に灼きついて離れない人間の心の奥底にしみ入る魅力にとり憑かれたものも……。にもかかわらずわが国では、J・ジャンセンの世界とまともに向いつた事例が思いのほか少ないことに、残念な思いがしていた。ひとつには一九六一年から一九六三年にかけてわが国で紹介された彼の絵画が「外国人によるフランス具象派の画家たち」という枠組でとり扱われ、また一九七〇年、東京の画廊における「ダンス」においても、もっぱら光の

世界に背を向けた群像や少女たちなど「レ・ミゼラブル（悲惨なものたち）」に焦点がしぼられた画家として位置づけられがちだったことも大きな要因であつたろう。ジャンセンが自己の画風を確立する一九五〇年代以降、そしてまた若き日のジャンセンが思い悩み壁に突き当たつた時期は、いわゆる「革新派」が主流を占め、新しくないもの以外はたやすく見捨てられる風潮がつよかつた。ジャンセンもまたその渦中に翻弄され、一時期完全な自己喪失の状態に陥つていたが、自己回復の契機がレアリティへの一途な固執という時流と相反する傾向とみなされやすかつたことも、ますます誤解を深めるものであつたことも否めない。事実彼の絵画はその特異で異様な人物像にもかかわらず表情らしきものが殆ど一貫していて、一様に打ちひしがれ悲嘆にくれるものたちばかりである。そしてまたその四角ばつた

大きな顔と四肢とのアンバランスな構図、と同時に数多く描かれる背を向けた群像たちや少女たちの無言で精一杯の自己表現等々、ジャンセンは自己自身の光り輝く部分をひたすら押し殺し、笑いを忘れたポーヴル(貧しきものたち)、社会の底辺にうごめく階層を冷徹に凝視しつづけた画家という当時の時代背景ではもつとも解りやすい分類がされた面もあつたらう。

ところで私が穂高の「ジャン・ジャンセン美術館」の開館直後に訪れて、ジャンセンについての知識や先入観などまったくないままに眼にしたジャンセンの世界とは、右のような観点とはずい分とかけ離れた異質なものであつた。それは驚きとか魅了されたという次元を超えた感動そのものであり、その世界からは身じろぎもできず、何か眼にみえない強大な力で一步も先へ進む肉体的運動や意志を完全に封じこめられていた感があつた。まず眼にとびこんできたのは「後ろ姿のダンサー」とか「休息」と題するしどけない少女たちの姿体である。バレリーナという舞台のうえで華かな脚光を浴びる世界とは裏はらに舞台の裾で瞬時の休息をたのしむ自由奔放な少女たちの姿。光の世界とはまったく無縁なところにあつて、人間の本性をむきだしにした辺りかまわぬ乱れた彼女らの姿体が、いづれも少女たちという類いまれな美しく汚れない肉体がモデルにされ

ているだけに、逆に一種郷愁にも似た爽かさど、忘れられたものが一挙に白日のもとに照らしだされる鮮明な光の束の集積となつて眼前に散らつた。しかも彼女らは揃いも揃つて後ろ姿や乱れた髪のかなかに顔を埋めつくし、何ひとつ訴えかけるでもなく、いかなる表情をも垣間みせることもなく、あたかもいかなる運命をも甘受するかのごときしたたかな存在感を全身で放射させているのだ。この透明すぎるほどの人物像の美は、もはや少女たちだけがもつ肉體の特権的な美ではない。それは神秘的な深い内省のもとに築きあげられたジャンセンの行きついた崇高な精神の産物ではないか。しかもこの美は超自然的で理想境の世界のもではなく、この世にしっかりと根をすえたまぎれもないレアリテイの現存にほかならないのではないか。「泣く老婆」にせよ——ジャンセンには老婆を描いたデッサンがことのほか多い——、一連の疲れ果て虚空をみつめる老婆たちの姿にせよ、彼女らの顔にはあわれみや同情を乞う要素など微塵もなく、逆に時間という長い階段の各階で幾重にも過ぎ去つた日々を反芻し、時間を光り輝く踊り場にひき出そうとする至福のまなざしではないのか、等々疑問がつきつきと湧いてでた。いったいジャンセンの魅力とは何なのか? 見るものの眼を釘づけにし、果てしないなぞの世界へと誘ないながら、いつの間にか見るものの魂を純化さ

せ、永遠の安らぎ、聖なる祈りにも似た世界へと導く秘密とは？ 私はジレンマと葛藤からやや焦っていたのだろうか。この種の絵画に魅了される私とはいったい何ものなのか？ 私は前進しているのか、それとも後退しているのか。にもかかわらずますますジャンセンの魅力に抗しがたく二度、三度とひんぱんに穂高の美術館にひき寄せられるうち、その答えは思いがけなく早くやってきた。それはおそろのおそろ、まるで自己自身を確かめるような感じで、ジャンセンに関する批評に眼を通したときだった。ジャンセンの絵画に社会的条件のようなものを求めてはいけない……世間は彼をして、レ・ミゼラブル（悲惨なものたち）を具象化



図1-1 後ろ姿のヘヤ・ピンで髪をとめたダンサー 1969



図1-2 シャニイーボンボンとギュギュスト 1952

した画家と評しているが、こうした位置づけほど彼を悩ませ、彼の意にそぐわぬものはないのである。『ジャン・ジャンセンの業績にいち早く着目したマルセル・ザールの右の言葉が天啓のように響いた。これこそまさに私が無意識裡に直感していたものを正鵠に言いあてているものではないか。マルセル・ザールはジャンセンの言葉「光はあらゆる事物に与えられた生命である。……各々の事物には光の観点から眺めると、それ自身のうちに秘められた人の興味を

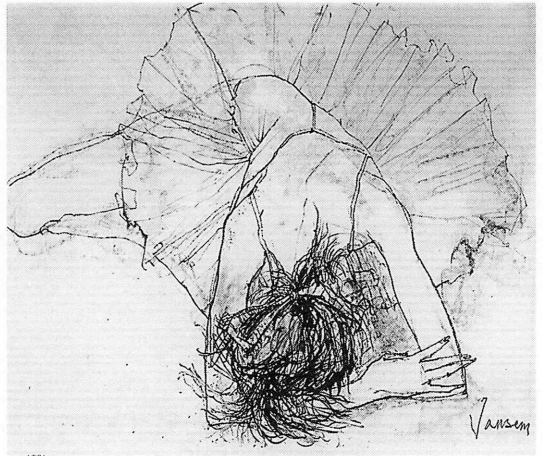


図2 休息 1981

そそらずにはおかぬ輝きがある。』から、ジャンセンを《本質的に事物に光を照射し、光のもとで事物を写しだす画家である。》とする。《光のもとでは、人間のもつ安らぎはセレニテ（静謐）なものになり、人間は画家の神秘的な太陽に照らされるとき、さまざまな段階をのりこえ、崇高な認識のみなもとと直面する……こうした光のもとでは、醜かろうが美しかろうが、身体が曲つていようがチビであろうが、豪華な衣服をまといようが、ぼろ服をまとい

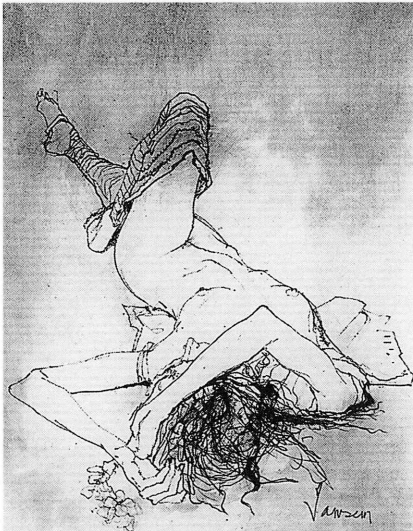


図3 レッグ・ウォーマーのヌード 1979

ようが、とるに足らなくなる。こうした光の世界では、光は確実に因襲を消し去り、光のなかに人物たちの不断の重力の光束しかとどめない。彼らはジャンセンと同じ見方でものをみる。彼らはジャンセンの発光体であり、発信者であり、密使であつて、ジャンセンの同胞なのだ。したがつて、ジャンセンの絵の背景には、風景もなく家具類の配置もなく装飾もない理由が判るだろう。こうした最小限のバック・グラウンドほど、人間の魂の具象化の集合体にはかならないものはない。』そしてさらに言う。《ジャンセンの世界には、風変わりな人びととは何ものであるかを決定づける原則がある。彼らの生命、性格、肉体は、この世に住



図4 かごをもつ女の後ろ姿 1971

むものの習慣とは異なるにせよ、われわれにひとつの作品を通して高度な断言を啓示した。それはジャンセンという芸術家の深い洞察から生じた精神的エネルギーによって支えられたものであり、作品に鎖された力強さとなってあふれている。したがって美も異様さもここでは奥深い美徳なのだ。》

またジャン・ロベール・ドウラオーは、ザールとはいささか趣きを異にするが、次のように書く。《ジャンセンの絵画には騒々しい叫び声をあげるものも、ほんのすこしのドラマティックなジェスチャーをするものもないが、恵まれないものたちの暗い生活を、レアリティックな生活の断

片としてわれわれに伝えてくれる。いわば受身で、疲れ果て、あらゆる努力も空しく、革命さえも救いにならないような……。だが彼の絵は、一連の行進する大人たち、老人や老婆を描くとき、不在で凍りついてはいるが、恍惚としたあたかもパント・マイムの役者の演技のような優しさをみせる。》ジャン・アルベール・カルティエも言う。《こうした彼の精神的光は、レンブラントと共通する……。彼の絵画は、今もなお具象芸術が言葉に言い表わせないもの、眼にみえないものを、眼にみえるものとして表現できることを証明した。ジャンセン自身は《私が描きたいと思うのは、私がみるもの、みたものである。私が興味を惹かれるものは、生命が他のものより真実で不変なものなかにあるときである。そうしたものをシンプルな人物たち、貧しい衣服の人たち、裸の足のなかに見出さないのであるか？裸足の女性こそすばらしいではないか？……とは言え絵画におけるフォルム（形式）は、文学において言葉が理解されねばならないように認識しうるものでなければならぬ。さもなければ文学における抽象的な文字遊び的なものになつてしまつたらう。》

ところでこうした数多くの的を射た贅辞やジャンセン自身の言葉などにもかかわらず、私はジャンセンについて口をささむことを長い間ためらい続けてきた。ジャンセンの



図5 老婆 1958



図6 キノコ商人 1955

世界を理解するのに言葉はいらぬのではないかと。批評というものは、とかくシニフィアンをシニフィエに性急に移しかえてしまいがちなので、シニフィアンとシニフィアンのたがいにまじり合い、たわむれ合うより広い無限の可能性を洩らしはしないか。たしかに多くの批評家たちの言葉

は貴重な道標ではあるが、次第に私の心を憂鬱にさせはじめていた。要するに切り口が見出せなかったのだ。だが今回このような文を書く気になった動機はきわめて単純であった。ジャンセンのような世界は、まず原点に立ちもどること。ジャンセン自身も言っているように彼がドガやレンブラントに多大の敬意を払っていることはたしかだが、彼の世界はドガやレンブラントとも異なる独自のもので、何人も真似の出来ないものである。ジャンセンの原点、つまり生きざまを彼の芸術活動の歴史とないまぜにしながら年代譜的に追ってゆくこと。むろんこうした試みはすべての芸術家について当てはまることだろうが、ジャンセンの場合、この試みはもっともふさわしい。ジャンセンは《私の絵に明白でないものなどあるだろうか?》と言う。さすればその明白さの謎を解きあかす糸口としても、ここ数年来ばく然と感じていた右のような観点が、このささやかな紹介文を書くに至った私の契機であり、行く先もまた自ずとそのプロセスから収斂されてくるはずなのである。

◇

◇

◇

ジャン・ジャンセンが生れたのは第一次世界大戦が終った翌年の一九二〇年三月九日、出生地はトルコ、コンスタンティノープルから百キロメートルほど離れたブルッスという町であった。人口一万人というこの小都市がなりわい

とするものは、もっぱらオリブ油の生産とカイコの飼育であった。両親はアルメニア人だったが、父は自営の生糸工場をもち二百人ほどの従業員をかかえていた。叔父もまた四つの工場をもち、共同して当時ではきわめて貴重な生糸をフランスのリヨンに輸出し、一家はきわめて富裕な境遇にあつたと言える。ところが生後まもなく、すなわち一九二二年にトルコとギリシャ間の戦争が起り、アルメニア人たちはかつてのトルコ人迫害の歴史からその報復を怖れ、一家はギリシャのサロニクに移住する。J・ジャンセンが成長し、教育をうけたのは、ギリシャの北東部エーゲ海に面するマケドニアであった。ジャンセンは早くから絵を描くことが好きだったので、絵具箱を買い与えられ、絵画の講義も受けた。当時のジャンセンはギリシャ神話に心酔し、古代ギリシャの複製画の模写にあけくれたが、とりわけ英雄ユリシーズのエピソードを絵に描くことに熱中し、その才能が認められこの地方の絵画賞を獲得している。そのせいもある。十三歳までの彼は好んでギリシャの英雄たちの生涯を描くことで過ごした。

一九三〇年、そうした一家に暗いかげをおとす重大な出来事が相ついで起る。まず人工生糸の開発で、自然の生糸はたちまち大打撃をうけ破産寸前の状態に陥つたこと、さらに追い打ちをかけるかのようにジャンセンが足を骨折、

病状は極めて深刻で、フランスでの治療、それも一家の財産を丸はだかにしかねないパリの病院へ入院することを余儀なくされる。母親に伴われてジャンセンはパリのサン・ルイ島の病院に入院、ついで、クレムラン・ピセートルの病院へ移る。治療法は絶対に身体を動かしてはいけないという厳しいものだった。だがこの三年間におよぶ病院生活からジャンセンが得たものは、身じろぎも出来ない身体的苦痛に慣れる習慣を身につけたことと相まって、若々しい思索を思ふ存分展開しえたことである。彼は身に振りかかった不幸を嘆くどころか、不平ひとつもらさずに運命を甘受し、代償として心の静謐という恩恵を体験するのである。と同時に病院という因襲的な世界にも馴染んだ。

この少年期における過酷な体験は、ジャンセンの世界を知るうえで終始キイ・ポイントとも道標ともなるべきものである。前述のように十四歳くらいまでの彼はもっぱら「千一夜物語」的オリエントの風土に浸っていたが、以後は身体其自然に反する不動の状態を受け入れることによつて精神的平穩をかちえ、運命を受け入れることによつて精神的・倫理的高みへと自己を上昇させることが出来るという誰に教わつたのでもない自力で築きあげた性格に導かれる世界へと自然に没入していくのである。加えて規則づくめの社会の縮図とも言うべき病院という環境に進んで適応

して行ったこと。こうした一見環境によって作られたようにみえながら自分自身で構築した性向は、一時期世の潮流にもて遊ばれ、完全な闇の世界で自己喪失に陥る苦難をも招くことにもなるが、そこから這い出たのも、やはりそうした彼自身の作りあげた性向なのである。言うなれば孤独、それも完璧な孤独を耐え忍んだもののみが知る有為転変のなかからの奇跡的蘇り……。

病気が恢復し、すでに青年の背丈に達していたジャンセンは、すぐさま創作活動を再開するが、それまでには真剣に宗教的生活を夢みたときもあつたらしい。運よく彼は叔母の所有するイシイ・レ・ムリノーの広大な空家をさまざまアトリエに変え、自らを画家と称して、数多くの肖像画を描いた。しかも好都合なことに彼の絵はきわめてよく売れた。だがそうした情況にあつても、彼の知性は幼いながらも自分がなお学ぶべきことが数かぎりなくあることを本能的に感じとっていた。彼はモンパルナツス通りにある夜間の美術学校に通うと同時にヴォージュ広場の予備学校にも通つた。この時期彼はセーヴルのコレージュ（中学校）でデッサンを教えていたアリアルと知り合いになる。ジャンセンと同じくアルメニア人だつたアリアルは、ジャンセンの才能に着目し、とくべつな好意でもつて彼をテルヌ広場の自分のアトリエに招き、きわめてアカデミックな教授

法でジャンセンにデッサンの基礎を教える。彼はジャンセンにルーヴルを訪れ、ルーヴル美術館を主要な学校とするよう勧めた。ジャンセンは彼のすばらしい指示に従い、以後毎日曜日、教会に通うかのようにルーヴル美術館の巨匠たちの作品の前に立ち、それは二十五歳になるころまで続く。アリアルはもつぱらティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼを推賞したが、ジャンセンはラファエロの方が好きだつた。そのころは輝かしい巨匠たちの真髓に迫るだけの余裕がなかつたのであろう。のち巨匠たちの偉大さを理解するようになるが、ジャンセンがもつとも傾倒したのは、やはりラファエロの影響をうけたとされるレンブラントであつた。

十七歳のとき、ジャンセンはルーヴルの二階にあつた印象派の部屋を巡つていたとき、ピサロの絵の前で大へんな衝撃を受け、釘づけになる。その強烈な感動はルノアール、モネ、ドガへと次々に移つていく。

と同時にマチスの絵にも魅了され、それを契機に決定的に他の現代絵画の流派にのめりこむ。ところでそれに先立つ数年前、すなわち十五歳半ばのころ、彼はアール・デコの学校の学生となつていた。考えてみれば、病院から出たあとの彼は、いかなる学校にも、いかなる教授にも師事せず、もつぱら自分の知識欲の赴くままに自分で自分を鍛え

あげてきた。その知識欲は数学の世界にまで深入りしていた。

ここで数学的な側面からジャンセンの絵画におけるバランス感覚について触れると、私は冒頭で大きな四角ばった顔にアンバランスな四肢ということを言ったが、ジャンセンの変形、すなわち光の視点からみた右のような人物像のバランスは、充分な省察のうえに計算されたものと言える。そのもつとも良い例が「かごを持つ女の後ろ姿」であろう。大きなかごをもった女性は左手を精一杯のばしてかごを左腰の上部で支えている。この右側に重心が傾きがちな身体的自然さに反して頭部が左側に向いているバランスをしっかりと支えているのは、右腰を支えている右手の位置なのだ。「肱をつく女」の場合もそうで、大きな顔を机の上で左手が支えている安定感、肱の部分に当てられた右手の五本指の配置である。

アール・デコでの修業の時期、ジャンセンは生計を支えるため、昼夜を分たずグレー・ハウンド犬競走のための挿画を描きまくる大収入をえ、競技が中止になると、生糸産業のためのモチーフなどを手がけている。やがて第二次世界大戦がはじまり、ジャンセンは足の故障のため兵役免除となるが、やはり生活費のためイシイ・レ・ムリノーの防毒マスク製造工場で終戦まで働く。(ちなみに彼は一九四二

年に結婚し、翌年には長女が生まれ、一九六二年までには、一男二女の父親となっている。)

一九三六年から一九四九年にかけて、ジャンセンはさかんに絵画を描き、芸術や絵画についての考察を怠らなかつたが、アール・デコの教師たちの話は彼の頭上を素通りし、肌合いが合わなかつたようである。現代という時代は真剣に美術を志す若ものたちにとって文字通り苦難の歴史であり、行き先は結局如何ともしがたい凡庸なものに終りがちであるらしい。とくに美学的分野においては、人間精神の進歩をはばもうとする由々しき現状に眼を開こうとしない。ジャンセンという画家もまた当然のことながらめまぐるしく変る時流に影響されざるをえなかつた。というよりそういう性向もひと倍つよく形づくられていたのか？ 彼は何と時流の作品が並べられている展覧会場を忠実に走り回つたのである。彼の耳には、何であれ新奇なものには敬意を捧げ、翌日には記憶からも消え去られるようなものに対して侃々諤々、大騒ぎする声が否応なく聞こえていた。彼はピカソに心酔し、批評家たちがまつりあげるものたちにも心ひきよせられた。だが彼はあたかも矛盾というパレットによつて打ちこまれるピン・ポン玉のようであつた。美的運動の不断の旋回が彼を苦しめた。彼はキュビズム、シュルレアリスム、抽象主義のあいだをばげしく振り回さ

れた。

一九三八年、ジャンセンはやつとの思いでアール・デコの学校のデイブロームを取得、自分を今や画家として認じるが、ここに何とも奇妙な画家が生れるのである。つまり修業期間中に自らの目標も本能も確信も信念も見失い、ただ絵を描くという衝動のみからかれて、あるときはキュビスム風の絵を描いたかと思うと一週間後にはフォーヴィスム風の絵を描くという画家が……。彼は現代芸術が自分をカフカの小説中の人物のように出口のない世界へ追いこんでしまったことも気付いていなかった。つまり釈放された囚人に突然行き先を防ぐ壁が下される。彼は悪夢の街中を八方走り回りながら自分でも判らない苦行に耐えるしかない。ジャンセンはもはや光を呼びよせることもできず、光は彼から遠ざかり、彼の絵画に浸透することを拒否し、一九四〇年のある時期、彼はとうとう自分が完全に闇にとり囲まれてしまったのを感じる。彼の絵は完全に黒で覆われていた。彼は叫ぶ。《私は呪われている！》と。だが彼は夜のそとへ自分を連れだす能力を自分のなかに確立させようとするつとめを怠らず、翌年にはサロン・デ・ザンデパンダに「ヴァイオリン弾き」という作品を送る。荒涼とした空間に立つ赤ら顔のおひとよしの男。まさしく孤独の象徴ではないか。彼はまたしても言う。《私は呪われている。

だから私は自分のためだけに、人からは何も期待せず、成功や富への希望もなく、自分の好きなことをするのだ。》

かつてのアール・デコの学生は、生活のため家具の意匠の製作に励む。何の感動もなく。だがここで奇跡が、ジャンセンにとつてはきわめて重大な転機がごく自然に訪れる。きわめて日常的なレイアウトとか一貫性のない黒と緑の排出から生じた黒い考えという抑圧状態をくり返すうち、次第に自分の凝固していた魂が溶けはじめているのを感じるのだ。彼は自然の姿をありのままに自分の心の赴くままに絵を描きはじめ、モンパルナツスのアカデミーでゴエルグを知り、彼の忠告に大いに啓発される。一九四六年、彼の心はもはやピカソの回顧展にも屈伏することなく、彼を熱狂させた「革新派」の画家たちの空しさを計りはじめるほど柔軟になつてゐる。

そうしたなかで一九五〇年のギリシャ旅行は、彼にとつて画期的な年となる。この幼少時代の源泉への回帰はまさしく一大転機となつた。それまで彼を鎖していた光は、彼の精神を開き、彼の精神を純化させた。地中海のオリエントの海岸や岸辺は彼に再生という治療、思いもかけぬ最大の恵みをもたらした。言うなれば彼は憑かれた人々の神がかり的威光によつて動かされてきた他者である自分から、自分自身にもどつたのだ。暗い神のもとでの戦いから見出

していた信仰が、今や明るい光のもとで甦える。彼はギリシヤで多くの率直だが粗野な人びと、農夫、陶工、釣り人たちに出会い、彼らを自分の心にもっとも近い人間の典型だ、と信じた。彼を閉じこめていた牢獄の柵はとり払われ、それまで異様な顔の人物たちが画布のうえで抽象的に並べられていたものが本質的な意味をもつようになる。彼は新たなエネルギーに充たされギリシヤからもどり、それは名誉をとりもどした静かさの世界へと通じて行くのだ。

以上がジャンセンの生きざまを年代譜的に辿ってきたあらまじだが、ここから推論されうるものとしては、ジャンセンの世界の秘密のキイ・ワードが、静謐、至福、聖なる重みにあり、なかんずくそれは少年時代における長い身動きもならなかった時期、しかもそうした運命を当たりまえのこととして受け入れ、いかなる情況にあつても何ものかを獲得した強固な意志、言うなれば孤独、絶対の孤独がもたらした恩恵が核ともなっていることは明らかだろう。したがって彼の作品の人物像たちに共通する運命を許容することに安らぎを見出している姿には、革命的要素とは全く無縁な静かさと孤独が光り輝いていて、それこそがジャンセンの世界に精神的高みを定着させている一貫した哲学と言えよう。

ところでジャンセンの絵画をイマジネールなものとしてとらえる考え方もあるが、ジャンセンの場合、これはあまり当てはまらないのではないか。イマジネールな世界とは、レアリテイへの反感から、作家が事物にデフォルムを強いさせたものであつた。一九世紀のロマンティズムは、イマジネーションを創作能力の女王として考え、ここではないどこか他のところ（ボードレールの『パリの憂鬱』のなかの言葉である）、より正確には無限の世界へ導くものとして扱びとつてきた。ドラクロワは《私が芸術創造の領域に安息地を見出すのは、オブジェのもつ残酷なレアリテイから逃避するときである》と叫んだが、ジャンセンにとつてそうした世界は単なる個人的な発明の遊びでしかない。《ジャンセンの創造するものは、まさしくイマジネーションの枠には収まりきれない。彼は自分の描く人々を屋外であらうとアトリエにおいてであらうとありのままにとらえ、彼らはジャンセン自身にはかならないがゆえに、自分の描くものたちをとことんまで知りつくしていた。……ジャンセンは出発点から執拗にレアリテイを追求する現代では稀な画家のひとりである。この点から彼は村の女性を完全に描ききつたクールベと比較することもできよう。……彼の絵画のもつフォルムは繊細で鋭く正確な線によつて支えられていた。……彼はまさしく線の科学の巨匠なのだ。》

ジャンセン自身の本心は奈辺にあるのか、彼は言う。《この世に明るい画家などいない。というのも画家たちが眼にする世界は、殆ど微笑をさそうものなどなく、そのことはゴヤやゴッホの例をよく考えてみてほしい。だから私も彼らと同様精一杯真実の重みなど探しはしないし、当然のことながら好きなものしかみない。あらゆる芸術家は無限のイマジユのうち、自分を惹きつけるもの、そしてまたそのなかからある種のフォルムとか色彩に魅せられるが、それは各人の性格とか様式から生じる自由な選択なのだ。かりにもし私の人物たちが悲惨であるとしたり、それは彼らの様相が精神的に私を感動させ、絵画的に私を魅了するからだ。私はそうした人物の多くを三年間のスペイン滞在、イタリア、そしてイシイ・レ・ムリノーで、それも通りや市場で発見した。そしてつまるるところすべては、もはやいかなる国籍をもたない、きわめてきわだったタイプとして溶け合うのだ。一種の綜合である。》《芸術の秘密とは、個人的な方法を正確に他者に翻訳し、理解させ、伝えることである。おそらく解釈のはばとか境界はあろう。さもなくば気まぐれ屋とか自由奔放に陥ってしまうであろう。レンプラントは複雑だが、あいまいとか謎めいてはいない。真実はそうした一切を超えたところにある。天才とはまさしく最大限の現実的フォルムを最大限の抽象のなかに組み

入れることであり、フェルメールはその術をよく心得ていた。きわめて現実的な同一の主題、たとえばヌードとか人物の類にせよ、偉大な画家たちに完全に、また可能なかぎり違った形で自己表現させることができる。要するにオリジナリティとはきわめて些細なことにあるのだ。そしてあらゆる創造者の力量とはこうしたほんの些細なことのなかにあること……》

ここで右のジャンセンの言葉に関連して彼のデッサンについて考えてみると、ロタンは《デッサンは彫刻の帰結である。》と言ったが、ジャンセンは《デッサンは絵画の前段階にすぎず、それに対して版画はそれ自身で完結したものである。》と言う。ジャンセンの版画について触れる余裕はないが、ジャンセンに関してはとくに、デッサンこそロタンと同じく絵画の帰結ではないだろうか。この点に関しては、ジャン＝マルク・カンパニーの次の言葉がもつともよくその真実を伝えるものだろう。《ジャンセンのデッサンほど彼の作品と不可分のものはない。それは始めから終わりまで一貫して、人間の血管の血液の流れのように宿命的で不可欠なものなのだ。》そして言う。《ジャンセンが不断に尊敬しつづけたオプジェは、女性の肉体である。とげとげしく効果的な線のデフォルメと省略は、どの角度から

みてもジャンセンのデッサンの特徴づけるものである一方、何ひとつ思いがけない不自然な姿体とか眼りの最中に不意をうたれたような内的心の動きの秘密を充たしている透明な女性の肉体のフォルムのもつ純潔さを犯すものなど全くない。ここには攻撃的で卑俗なエロティスムは全くない。「花かざりの帽子の女」「猛獣使いの女」「レッグ・ウオーマールのヌード」などは、肌着や羽毛の背景のなかで清純な官能美を表わす様式を反映している。インスピレーションによるかのような数本の厳密な線の魔法、ここにこそ彼のデッサンの一切が言いつくされている。》そしてP・ヴァレリーの《人間のなかでもっとも奥深いものは、人間の肌である》を引用して、事実人間の肉体を包む肌ほど視覚や触覚に訴えるもっとも快く考えさせるものがあるか？人間とくに女性の肌（筆者は二次元の表層にあるデッサンと人間の肌とを類比させているであろうが）は、ジャンセンに詩的な世界雰囲気を与える広大な世界であり、その詩的なメランコリーが不在であることは、ジャンセンにおいて絶対にないのである。》

私は先に孤独、絶対の孤独こそジャンセンの世界の秘密を解きあかすものであると言った。その孤独のゆえにジャンセンも時流におもね流されもしたが、結局もとの静かさ

にもどることによつて自己を再生させた。ところで唐突ながらシュルレアリスムの大御所A・ブルトンは秘教主義における限りなき孤独、絶対的隔絶の状況を理想とした。そして《高いところと低いところ、夢と現実……が相矛盾しなくなる至高点》を求めつづけた。だがA・ブルトンには達せられたであろう右のような理想や境地が、われわれのまえに具体的姿をとつて現われるのに出会うことは、なかなかむずかしい。ことによるとジャンセンの世界こそシュルレアリスムさえなしえなかつた姿を先取りしているのではないか、という気がしなくもない。

ジャンセンと親交が厚かつたというジェムス・アンソールは、ジャンセンが「私は長生きして未来のひとたちに語りたいたい」と断言したのを聞いたという。ジャンセンの特殊な世界は彼にとつて未来の人間に語りかけるものなのだろう。

したがってジャンセンの世界はこの先さらに深く作品と向かい合つて対話をくり返して行くべきものだろう。さすれば一心不乱に写経をつづけた女性が、ある日突然仏の光が眼前に現われたという美しい日本の物語のように、ジャンセンの奥深い魂が語りだし、清らかな祈りのような世界が広がってくるのかもしれない……。